



— チェルノブイリに思いをよせて —

ポレーシェ



<「菜の花 種まき会」後の交流会（9月10日）>

「ふるさと（地域）の大切さ」
「人と人のつながりの大切さ」
「人に伝えることの大切さ」

…「菜の花 種まき会」に参加して…

（八日市南高等学校 教諭 田村 晃）

菜の花による農地の復興活動では、参加者が皆元気で明るく活動に参加していた。特に、相馬農業の生徒や一般の参加者の言動を聞いた、本校の生徒達の得たものは大きかったと思う。このように地道な民間の活動によって、地元を復興させようとしている

姿はかけがえのないものである。午後は、相馬農業高校との交流をしたが、相農生の発言からは、震災を経験し「ふるさと（地域）の大切さ」や「人と人の繋がり大切さ」が、今の自分達の活動に繋がっているのだという意見を聞き感動した。今、日本では少子高齢化が進み、人口減少問題・地方再生問題等の種々の問題に直面している。この問題を解決していくためには、これから（未来）を創る若者が自分たちのこととして、今後直面する問題を考えることが必要になる。そのためにも、被災地の若者（高校生達）が抱いた想いを、滋賀県の高中生達にも伝えていく必要があると考える。

【生徒の声】

相馬農業の生徒との交流で印象に残ったのは、「私達は地域に何ができるんだろうか」という想いと姿勢でした。菜種の種まきでは、相馬農業の生徒はみんな活気があり、私達も楽しくできました。私が今回のボランティア活動で学んだことは、「人と人の繋がり大切さ」と「人に伝えることの大切さ」です。まだまだ復興への道のりは長いと思いますが、皆で力を合わせて、必ず福島復興を実現させたいです。（生徒-1）

相馬農業高校生の地元愛にあふれた発言を聞いて、すごいなあと思いました。また、震災で辛い思いをしているはずなのに、当時のことについても話してくれました。そして、なにより明るく笑顔で接してくれたので、私達も笑顔になれました。相馬農業高校の生徒さんのように前向きに頑張りたいと思いました。（生徒-2）

〒460-0012 名古屋市中区千代田5丁目11-33 STプラザ鶴舞5階B

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行名：三菱東京UFJ銀行 高畑支店(店番号297)

口座番号：普通 1682863

口座名義：特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部 理事長 原 富男

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax：052-228-6813（月・水・金 10:00 ~ 17:00）

ホームページ：<http://www.chernobyl-chubu-jp.org>

★10/15.16.22.23 は南相馬市・浪江町、11/12 は富岡町と、秋の測定活動は好天に恵まれ、トラブルもなく終了しました。(空間線量の分析は、P3「第12期測定結果の考察」を参照してください。) また、測定時に採取した土壌の測定も終了しました。南相馬市と浪江町の土壌汚染は、JR常磐線・国道6号以東では、南相馬市が1,296~1,609 Bq/kg、浪江町が2,799 Bq/kg。高速常磐道~JR常磐線・国道6号間では、南相馬市が2,495~7,903 Bq/kg、浪江町が38,048 Bq/kg。高速常磐道以西では、南相馬市が7,431~9,097 Bq/kg、浪江町が45,436~81,777 Bq/kg (ここは帰還困難区域)。富岡町では、JR常磐線以東&町役場以北が135,771 Bq/kg、高速常磐道以東&町役場以南が10,626 Bq/kg、JR常磐線~高速常磐道間&町役場以北が17,290 Bq/kg、高速常磐道以東&町役場以北が20,339 Bq/kg、高速常磐道以東&町役場以南が5,465 Bq/kg (数値はいずれも各ブロックの平均値) となりました。以上の数値は、空間線量に準じています。空間線量の減少だけを基準に、政府の避難解除政策がすすめられていますが、今なお、土壌汚染は全域に渡って高い平均値を示しており、チェルノブイリ事故以降のウクライナやベラルーシのように、「土壌汚染を基準にして避難地域の設定を再考する」事が必要と考えられます。

★秋の長雨に悩まされ大幅に遅れたナタネ播種も、ようやく11月第3週後半に終了しました。早い圃場と遅い圃場では、2ヶ月のずれがあり、来年の収穫が心配されます。しかし、今年は播種前の圃場手入れを今まで以上に行ったので、何とか冬を乗り切ってくれることを祈る気持ちです。播種面積は、新たに矢川原地区(約10ha)、大甕地区(約20ha)が増えて、70ha強になりました。面積の拡大は「油菜ちゃん」の生産量増大につながります。課題はここからで、油のみの販売では収穫量に追いついていきません。



今年の2月に申請し、途中修正要請があり気をもんでいた「油菜ちゃん」の商標登録が、特許庁から認められ、11月4日付で登録書が発行されました。遅れていた6次化商品の開発が、いよいよ急がれます。相馬農業高校(食品化学科)に依頼していたドレッシングの開発も、校内で最終案がまとまり「新たなレシピ」が完成しました。それに基づき製品化が進みます。また、「河田レシピ」で私的に試作されていた「スキンケアクリーム」も某メーカーに依頼し試作品を検討した結果、製品化を進める事となりました。両品とも、4月の「菜の花サミット」にはお披露目できるよう進めます。

★「第17回全国菜の花サミット in 南相馬」開催の準備が、本格的に始動し始めました。11/18に第1回実行委員会が開かれ、市・県・商工会議所・観光協会を始め24団体の賛同を得て、実行委員会を組むことができました。開催のメインテーマは「菜の花は未来をつくる、復興から再生・創造へ」(仮称)で、1日目…全体会、2日目…4分科会&エクスカージョン(体験型見学会)の予定で開催します。事務局は、実質的に「南相馬農地再生協議会」が担う事となり、かなりの負担ではありますが、南相馬の「菜の花プロジェクト」にとって、大きな転換点になるようなサミットにして行きたいと意気込んでいます(P6を参照してください)。

★浪江町の長期宿泊許可が11月から始まり、来年4月に一部避難解除、飯館村も同じく4月の解除に向けた動きが加速しています。しかし、7月に解除となった小高区では、川房地区の住民から「除染後帰還してみたら、空間線量が高くなっており、行政に再除染を依頼しても聞いてもらえない」等々の発言が聞こえてきます。さまざまな手法を駆使して、帰還への呼び掛けが行われていますが、現実には帰還したのは12,000名の内、約900名のみ(10/12現在)です。帰還した方々へのケアは当然ですが、「帰還しない」「帰還できない」方々が、今見捨て去られようとしています。東電が起こした事故は、決して自然災害ではない、人災なのです。保障の打ち切りではなく、帰還しなくても人並みに生活できる長期の支援体制を、今こそ構築すべきと考えます。

第12期(第24次・25次) 空間線量率測定結果の考察

(池田 光司)

10月後半、福島第一原発事故から半年毎に行っている空間線量率(空間の放射能の強さ)の測定が行われました。事故から5年半、12回目の測定となります。今回の測定で明らかになったのは、空間線量率は下がり続けているということです。

放射能の原因となる放射性物質は、元々時間とともに減っていくという性質を持っています。その性質は、物理的半減期(半分の量になるまでの時間)で示され、半減期が短いほど放射能の減り方が早くなります。今回、放射能の原因となっているのは主に放射性セシウムですが、この放射性セシウムには、放射能の減り方が早いセシウム134(半減期約2年)と、放射能の減り方が遅いセシウム137(半減期約30年)が含まれています。当初、放射能全体に占めるセシウム134と137の割合は7:3でしたが、セシウム134が短時間で減っていくため、5年半経った今では割合は逆転して3:7となり、セシウム137が優勢となっています。すなわち、物理的半減期から考えると、年々放射能が減りにくくなっていると言えます。計算上では、放射能が半年で減る割合は、当初11%だったものが、5年半経った今では6%となります。では、実際のここ半年間の放射能の減り具合はどうだったのでしょうか。下の表に、各地区の今年4月と10月の平均空間線量率の推移を示しました。

各地区の平均空間線量率の直近半年間の推移

地区	平均空間線量率[$\mu\text{Sv/h}$]		減少率 [%]
	2016.4 第11期	2016.10 第12期	
鹿島	0.19	0.17	11%
原町	0.23	0.22	1%
小高	0.30	0.27	7%
浪江	1.71	1.41	18%
富岡	0.86	0.67	22%

上の表から、原町区以外は、この半年間、物理的半減期以上に放射能が減っていることがわかります。特に、空間線量率の高い浪江町や富岡町において、大幅な減少が見られます。

今までも、春から秋にかけては、放射能の減少が大きくなる傾向があったのですが、今回もその傾向が現われました。夏場は雨が多く、地表付近の放射性セシウムが雨で流されたり、地中に浸透したりすることで、物理的半減期以上の放射能の減少があった、環境効果があったと考えられます。なお、測定は500m四方に1点の割合で行っていますが、各測定点の値を詳しく見てみると次のようなことがわかります。

- ① 原町区は、平均値で見ると放射能レベルが下がっていないようにも見えますが、測定値が0.15 $\mu\text{Sv/h}$ 未満であった測定点の割合は、33%から38%へと着実に増えています。紙面の関係上、詳しいデータは載せられませんが、どのエリアも放射能レベルが低下した測定点の割合が増えています。
- ② 浪江町や富岡町では、放射能レベルの高い所の方が放射能の減少率が高い。放射能レベルの高い所は、地表付近に多くの放射性セシウムが含まれること、また、山間部が多いことから、その分雨による環境効果を受けやすいと考えられます。

以上、今回の測定の分析結果の要点を示しましたが、マップおよび詳しい分析結果は、チェルノブイリ救援・中部のホームページ <http://www.chernobyl-chubu.jp/org/sokutei-map.html> に掲載する予定です。最後に、測定に協力していただいたみなさま、ありがとうございました。



大盛況！ Xmasカードキャンペーン

@ワールドコラボフェスタ (市原 佳代)

10月22日、名古屋栄のオアシス21で開催されたワールドコラボフェスタにチェル救も出店し、クリスマスカードキャンペーンを繰り広げました。6～7人が精いっぱいの中、クリスマスカードを描いてくれる方たちで、一日中埋め尽くされていました。ジトミル・コーラスデン出身のウク

ライナ人の少年も現れ、ネイティブウクライナ語でカードを描いてくれました。ナロジチの子ども達、びっくりするだろうなあ☆

そうして出来上がった120枚のカードを、ウクライナそして南相馬の子どもたちに届く…そのときを思い浮かべながら、テントの天井に吊り下げていき、さながらお花畑のようでした。

ワールドコラボフェスタは、毎年繁華街で開催されるため、NGOの活動に馴染みのない人達も多く訪れます。そういう人達に足を止めてもらい、チェルノブイリや福島のこと、そして、菜の花プロジェクトのことをお話し関心を寄せていただけると、とても嬉しいです。たくさんの思いが形になった秋の一日でした。

福岡から愛を込めて

(藤迫 智)

みなさんはじめまして。この度クリスマスカード作りでの記事を担当させていただくことになりました「お茶 cha 本舗」の藤迫と申します。さて、今年の11月19日(土) 11:30～14:30までの3時間、福岡県那珂川町にある安德小学校におきまして、チェルノブイリ

の子ども達に贈るクリスマスカード作りを実施させていただきました。当日は「祭り安德っ子」という1年に1回のイベントがあり、児童だけでなく、多くの保護者の方々がお越しくださいました。「チェルノブイリ原発事故」の話は、現在子ども達の社会の教科書に掲載されておりません。あわせて30年前の事故のため、若いお父さんお母さん達もご存知の方は大変少なくなっています。今回、学校そしてPTAとの協議も重ねました。その中で、チェルノブイリ原発事故が実際に起きたこと、そしてその後の放射能による長く続く被害など、福島原発事故後の「風評被害」に繋がる恐れがあるので、実施には細心の注意を払うことで許可をいただきました(実際、安德小学校にも、福島から避難してきたご家族がいらっしゃいます)。本来であれば、事実をしっかり伝えることが必要なのですが、教育現場の限界を感じました。

今回はそういうわけで、「ウクライナのお友達にクリスマスカードを作って贈ろう!」ということでブースを構えました。思ったより多くのお子さんそして保護者の方が参加して、見たことのないウクライナ語を書きながら楽しそうに作っていました。全部で103通のカード作りを行え、来年実施の手応えもありうれしく感じます。カードの台紙は、MARKS社から無償でご提供いただきました。来年も引き続き提供していただけるそうです。その他は、安德小学校親父の会「安德おっ党会」にて準備いたしました。まずは、皆さんに情報の「入口」を感じていただくことができたのでは?と思います。

今回のクリスマスカード作りは、来年も引き続き行い、安德小学校の恒例行事にします。



高齢者と大学生と一緒に、クリスマスカードづくり楽しんじゃった

(山岸 秀樹：24 次放射線量測定プロジェクト)

はじめまして、こんにちは。生まれて初めて「測定プロジェクト」に参加した、学校用務員の山岸です。よろしくお願いします。

福島へ向かう車内で、ウクライナと福島のみなさんがお互いに助け合い、交流していることを聞きました。そのひとつがクリスマスカードキャンペーンでした。「ひとりが 10 枚のカードを作るより、10 人が 1 枚ずつ作る方が大切ではないか」という提起に引かれた山岸は、11 月 8 日 (火) 午後、N 市デイサービス施設の工作の時間を利用して、ウクライナと福島のみなさんに送るクリスマスカードづくりに参加しました。

24 次測定で一緒したチェル救の神野英樹さんから、クリスマスカードキャンペーンの取り組みの経過などのお話を伺った後、カードづくりを始めました。参加者はデイサービス利用者 16 人、ボランティアの大学生 3 人、施設職員 4 人と神野さん、山岸でした。高齢の利用者は、戸惑いもなくシールやクリスマス関連の切り抜きを貼っていました。中国出身の利用者は、達筆な中国語で新年のお祝いの言葉を書き綴っていました。中には人の作品に自分のお名前をサインするハプニングもありましたが、楽しく過ごすことができました。

山岸も、参加者の乗り？ノリ？に引っ張られる形で、2 枚カードを作りました。ウクライナや福島のみなさんに「For you みなさんと共に生きていきます」と書きました。後日、チェル救から施設宛てに礼状が届きました。チェル救の信頼と敬意を込めた行動が、活動を支えていると思いました。

ボラみみからの参加です！ (小島 綾華)

初めまして。今年のクリスマスカードキャンペーンに、ボランティアという形で参加をさせていただいている小島綾華です。

現在大学 2 年生で、趣味は旅行や絵を描くことなどです。私はボラみみでこの活動を知り、手紙やカードを作るという作業が好きであったこともあり、ぜひ一緒に活動させていただきたい！と思いお電話しました。今後も、温かく迎えてくださったスタッフの方々と一緒に、頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします。

さて、クリスマスが近づくにつれ、カードキャンペーンは真只中です。10 月のイベントとしては、ワールドコラボフェスタがありました。この日集まったカードの数はおよそ 120 枚！ということで驚きでした!! 子どもから大人まで、多くの方が参加してくださり、その様子を見るだけでほっこりする気持ちになりました。たくさんのご協力をありがとうございました。この日、実は私も、活動を始めてから初めてカードを作りました。作ったカードがウクライナや福島の子どもたちに届くのだと思うと、なんだかうれしい気持ちになりますね。

また、11 月には山里学童でのカード作りにも参加させていただきました。「自信作！見て見て」と言ってくれた子や、ウクライナ語で頑張ってる文字を書いた子、一人ひとりオリジナルの素敵なカードができました。カードを開けると飛び出す仕組みを作ってくれたものが多く、すごい！と感心するものばかりでした。中には 2 枚目を作りたいという子もいて、楽しそうに作るその姿に、心のこもったこの活動に携われる喜びを感じました。

12 月からは、みなさまからいただいたカードを配送する準備が始まります。カード以外にも、事務所に届けていただいたたくさんの折り紙や手作りの物のひとつひとつに温かみを感じております。ご協力いただき、本当にありがとうございます。



第17回 全国菜の花サミット in 南相馬

いよいよ実行委員会がキックオフ!

(NPO 法人 菜の花プロジェクトネットワーク 代表 藤井 絢子)



2017年4月22日(土)～23日(日)南相馬での開催に向け、準備を進めて来ました。そして11月18日、第1回サミット実行委員会が開催され、南相馬市内の多くのセクターの方々が、実行委員として参加くださいました。ここに到る思いに少しふれてみたいと思います。

「フクシマ」が遠くなっている。あれだけの惨事ですら、人々の意識から薄れてしまうのか？もう6年、まだ6年？あの3・11からの年月の流れの感じ方は、いつも、この二つの思いの間を動いています。先日の大きな余震は、「フクシマ」をフラッシュバックさせました。まさに進行中である怖さでもあり、忘れかけている一人ひとりに、「忘れてはならんぞ」というシグナルだったのかも知れません。2012年秋、南相馬県の浜で、菜の花の種子をまいてから5年近くなりました。当時、地震・津波・原発事故の被災の地は、多くの生命が飲み込まれ、シーンとしており、未来への夢どころではありませんでした。この地で、菜の花に一筋の希望の光を託せないか？との思いで、地域の方々と模索しながら、第一歩を踏み出す事ができたのでした。高校生、地域の方々、事業者、行政、メディア、金融機関、東北大学、「チェルノブイリ救援・中部」等に、滋賀からの菜の花ボランティアバスメンバーが集い、種子をまいたのです。「こんなに皆が揃って、汗かいて、話して、笑って。震災以来初めてだな」という声が、あちこちで聞こえましたが、これがその後も続く力のベースにもなっていると感じます。「チェルノブイリ救援・中部」の放射能測定センター(とどけ鳥)が、多くの人々の出会いの交流拠点となり、「南相馬農地再生協議会」の誕生にも、こぎ着けました。菜の花に一筋の光を、と始めた菜の花プロジェクトが、今や日本一の面積に迫ろうという程の拡がりになっているのです。

2020年東京オリンピック・パラリンピックの話題の影になってしまっている「フクシマ」の存在アピールを、南相馬全国菜の花サミットで、思いっきり発信できたらと思います。高校生が、農業者が、再生可能エネルギー挑戦者達が、語ります。そして、創造的復興からほど遠い現実もまたあるのだという事を、現地の方々との出会いやエクスカージョンで、直接身体で聴いてほしいと願っています。チェルノブイリ(プリピャチ市)生まれのシンガー、ナターシャ・グジーさんのコンサートも準備しています。バンドゥーラを奏でながら、チェルノブイリからフクシマへの思いも聞かせていただけそうです。サミットにお越しく下さい。満開の菜の花が、皆さまを歓迎します。

菜の花の種まき会 & 放射能測定隊に参加して

(大阪府箕面市 北川 照子)

9月の「菜の花の種まき会」に、友人と3人で参加しました。集合場所には、地元の農家の方々や相馬農業高校の生徒さんたちのほか、バスをチャーターして滋賀県から駆けつけたNPO「菜の花プロジェクト」の方々や八日市高校生などなど、100名をこえる人たちが集まりました。

軽トラックの荷台をステージ代わりに、世話人や関係者の方々のあいさつ、作業の説明がありました。そして3人1組になって「種まき係・肥料やり係・土のふみかため係」の役割分担をきめ、1本150メートル以上あるような畝に挑んでいきました。しかし、平均年齢60歳の我がチームは、1本目の畝ですでにパテパテ。何とか畝3本は植えましたが、あとは、若者たちに任せました。



種まきのあとは、公民館で「交流会」が行われました。朝早くから地元の人たちが、会場準備やお料理づくり(天ぷらやサラダなど)をしてくださり、みんなで食事をしながら、高

校生たちの活動発表を聞きました。彼らは、菜種油を使って6次産業化を図り、マヨネーズや石けんなども作っているそうで、高校生たちの工夫と意気込みに希望の光が見えました。

私たちも、箕面市の名物「もみじの天ぷら」をお土産にもっていきました。これは、平安時代から箕面山のお寺でおもてなしに使われていたお菓子で、箕面山のもみじを塩漬けにし、甘めの衣をつけて菜種油で揚げたものです。それに、昔はこれらの寺の灯明に菜種油が使われていたそうです。

地元のかたが、塩害に強く種子に放射能を含まない菜の花を、「神様からの贈り物」と言われていました。古来から日本で重宝されていた菜種油です。これからも高校生や農家さんたちがうまうまコラボすれば、新しい何かが生まれてくるような気がしました。



放射線測定ボランティアに参加して (末吉 美帆子)

一日目は原ノ町、翌日は鹿島地区。それぞれ約3時間で30ヶ所余り。順調に終了できたのは、ひとえに地元を知り尽くしたボランティアさんのおかげです。地元の歴史・住民感情・復興への思いなど、本当に勉強になる時間でもあり、一緒に測定できたことに感謝です。

測定日は、飯館村長選挙期間中。選挙カーが入れない住民がいない町。他市の仮設住宅付近で遊説するしかない候補者。空しさが込み上げ切なくなりました。新潟県知事選挙もあり、再稼働慎重派の米山知事当確の開票速報に、宿泊先の松の湯旅館でガッツポーズしました。たった一度の原発事故で、こんなにも人々が泣き、引き離され、苦しんでいるのに、再稼働などあり得ません。

私の住む所沢市がダイオキシン報道で有名になった1999年。ともに活動していた農業者が、埼玉県から「敷地内に測定機を置かないか」と頼まれ、苦悩したことがあります。「本当にダイオキシンがあるのか真実を知りたい。でも万一高い数字が出たら、さらに収穫物は打撃を受ける…」と。林立する中間廃棄物処理事業所から、白煙が立ち上っているのは事実。結論として彼は、家族会議で議論し測定機を置きました。「〇〇産だからダメ」と言われる辛さを、私たちは散々味わいましたが、現状を把握し、安心していくために正確な情報が必要なことを、私は経験から学びました。市は、現在もダイオキシン測定を続けています。

チェルノブイリ救援・中部の放射線空間測定の積み重ね、市民測定所の食品・土壌・水の測定活動は、「測って事実を知る」「わかって食べる」ために貴重な活動だと、心から敬意を表します。「測って事実を知り、わかって食べましょう。生活していきましょう。」と皆に伝えたいと改めて思います。

小高から乗った、再開した常磐線の車窓から月が輝いていました。「福島をずっと応援していきたい」と改めて思った、素敵な4日間でした。心から感謝。

震災後、初めての福島県入り

(工藤 文彦)

私は普段、東京のユーラスツアーズという旅行社で働いていて、今年4月の「チェルノブイリ救援・中部」のスタディ・ツアーを少しばかりお手伝いさせていただいたご縁で、10月21日から24日まで、測定隊に参加させていただくことになりました。4日間のうち2日間、私は原ノ町で測定作業に参加させていただき、また小高・浪江・鹿島などを皆さんと見学させていただきました。

測定も、被災地・放射線残存地域の見学も、非常に勉強になったのですが、私は難しいことは分からないので、感じたことだけ書こうと思います。こんなにショックを受けた旅は初めてでした。処理場行きを待つフレコンの山、荒れ放題の畑、撤去が始まった小高の商店街。問題の風化は東京



で実感していますが、とんでもないことです。残った方も、去って戻ってくる方も、戻らない方も、きっと皆勇気を振り絞って、悩み抜いて、前を向いている。地元の方の現状評価は、「人が戻ってきた」「戻ってからの現実が…」等フォーカスは様々ではありましたが、産業面・広報など、色々な側面から皆それぞれに、前向きにかつ現実的な復興が模索されています。人は、このような状況でもこんなに頑張れるのか、頑張るしかないのか。知識と体験のない私は、ただ人のエネルギーに圧倒されてしまいました。被災地の現状はもちろん、皆さんのエネルギーにショックを受けました。

今回だけでも様々な出会いがあり、チェル救さんはもちろん様々な人が集まっている...と思えるのですが、それはきっと双葉屋さんにいたから思うことであり、実際は全然足りていないということだそうです。できることは限られるけれど、その「限られたこと」だけでも皆がやると、かなり違って来るはずですよ。

実は私は、測定隊どころか震災後の福島県入りが初めてで、かなり緊張していました。邪魔でなかったら良いなと思いつつも、当然のように次回の参加を決心していました。本当にありがとうございました。

トンネルの向こうに見えるのは

—測定隊が行く— 富岡町編（星野 賢一）

私が暮らす埼玉県には、権現堂堤という桜の名所があります。そこには、ある一本の桜の木、かつて富岡町から植樹されたソメイヨシノがあります。それはやがて、毎年多くの富岡町民が集まって来る木として知られるようになりました。2011年3月、富岡町と友好都市である杉戸町は7台の大型バスで救援に向かい、200名ほどの富岡のみなさんを乗せて埼玉に戻ってきました。その時は誰もが、これは一時的な緊急避難だと信じていました。

しかし、あの日から5年が経ち、最初の2年は警戒区域として全町域が立入禁止でした。そんな時、権現堂堤の富岡桜の木の下に避難者のみなさんが集い、望郷の歌をうたう映像が報道されると、関東各地の避難先から富岡町民が集まってきたのです。散り散りになり行方の知れなかった友人同士が再会し、桜の木の下で抱き合う光景が毎春流れるようになり、一本の桜がバラバラになりかけた人々の気持ちをひとつにまとめる、シンボルになったのです。

富岡町民にとって、桜は特別な存在なのです。樹齢100年、およそ1500本。富岡町夜ノ森地区の桜のトンネルは、全国に知れた桜の名所です。しかしその大部分は、原発事故後5年経ってもなお、帰還困難区域として立入禁止のままです。警戒区域解除後も、ここだけは入れません。満開の季節になっても、囚われの桜たちを鉄柵のかなたに見つめる町民たちの背中がせつないです。

今年の春に続き、第2回目となる秋の富岡測定隊参加者は12名、うち6名が地元町民で、6班編成6つのエリアに散りました。現在の富岡町は、第一原発に近い北東側から順番に、「帰還困難区域」「居住制限区域」「避難指示解除準備区域」の三区域となり、「準備区域」は来春解除を目指しています。私が担当したエリアの多くは、線量の低い「準備区域」でしたが、町で会うのは除染作業員ばかり。各地で住宅の解体も進み、戻る人も少ないと聞きました。すると、測定も終盤に差し掛かった時、不思議な光景に出会ったのです。農地除染を終えきれいに整地された畑の真ん中に、見慣れぬ棒のようなものが…。

「なんだ？これ？」よく見るとソメイヨシノのか細い苗木、しかも二列等間隔で。「ここに桜のトンネルをつくるのか??」夜ノ森の桜並木は、戊辰戦争後100年かけて今の姿になりました。苗木を植えた先人たちは、100年後の人々の笑顔を信じて植えたはずですよ。ここに並ぶ苗木たちが、大樹のトンネルになるのはまだ数十年先ですが、権現堂堤の映像も重なり、この若木のトンネルの下にやがて人々が集い、町が賑わいを取り戻していく風景が、まだ見ぬ桜のトンネルの向こうがわに見えたような気がします。



今年 6 月 30 日、環境省は福島原発事故で発生した除染廃棄物について、「Kg 当り 8000Bq 以下であれば、公共事業で道路工事や堤防などの盛り土に利用可能」だと決めた。そもそも、この 8000Bq 基準は何の根拠も示さずに、原発事故 2 か月後の 2011 年 5 月に環境省の秘密会合で決めたもので、「この基準以上の汚染物は中間貯蔵施設に搬入し、30 年以内には別の場所に移動する」というものだった。その約束もすでに破たんしており、国の廃棄物処理計画は国全体を放射能汚染にさらすものだ。

事故前の基準は Kg 当り 100 ベクレル

福島原発事故前は、いずれ廃炉で出る汚染物質の基準は「クリアランス・レベル」と言われ、セシウムの場合 Kg 当り 100Bq とされていた。現在もこの基準は生きている。しかし、福島原発事故で事態は一変し、この基準をクリアする事は無理、と判断した。現在福島を始め各地に積み上げられた除染廃棄物の「フレコンバッグ（1 個当たり 1m³）」の量は 2200 万個、東京ドーム 18 個分で、この半分が Kg 当り 8000Bq 以下である。環境省は、Kg 当り 100Bq に浄化するには 2 兆 9127 億円かかるが、8000Bq 以下なら 1 兆 3450 億円で済むという。これを「経済的・社会的に合理的」と主張する。これは明らかに根拠のない「二重基準」であり、経済優先の考え方である。重量にすれば 2200 万トンの汚染土壌を、全国各地の産廃処分場や道路工事などに使う事になる。その上、8000Bq 以上の廃土を貯蔵する予定の「中間貯蔵施設」の土地は、大熊町・双葉町の住民の反対で、予定の 1 割しか確保できていない。「中間貯蔵が、いずれ永久貯蔵になる」と考える住民の恐れは当然である。その結果、膨大な量のフレコンバッグは、各地の「仮置き場」に置かれたまま、半減期で 8000Bq 以下になるのを待っているのだ。この二つの

基準について、環境省は「100Bq は安全に再利用できる基準」、「8000Bq は安全に処理するための基準」と主張している。即ち、8000Bq 以下の残土を全国にばらまくのは、「廃棄物の処理」なのである。これは、国中が放射性セシウムの処理場になることを意味する。

緊急事態は継続中

今年の 3 月 3 日、民進党の衆議院議員逢坂誠二氏は国会で、「2011 年 3 月 11 日に行われた原子力緊急事態宣言は、いつ解除するのか」と質問した。これに対し安倍首相は、「原子力災害の拡大防止の応急措置の必要がなくなった時に解除するが、住民避難や復旧の実情を踏まえて行うものであり、現時点で見通しを述べる事は困難」と答弁している。安倍首相の「アンダーコントロール」宣言は二枚舌であり、緊急事態下でオリンピックを誘致したのである。見せかけの除染対策の結果、4 年後のオリンピック時には 8000Bq 以下の汚染土壌が全国にばらまかれているはずで、それこそが国の未来を危うくする新たな緊急事態である。地震や津波、大雨や台風などの災害大国日本で放射能をばらまけば、国民全体が被曝の脅威にさらされる。こうした状況こそが国民の緊急事態でなくて何であろうか。 (2016 年 11 月 23 日 河田)

2016年度上半期 活動計算書

特定非営利活動法人 チェルノブイリ救援・中部
(特定非営利活動に係る事業会計)

(単位：円)

自 2016年 4月 1日 至 2016年 9月30日

科目		金額	
【経常収益】			
1. 受取会費	正会員受取会費	93,000	
	賛助会員受取会費	369,000	462,000
2. 受取寄付金	ミルク	57,500	
	フィルガ 刊支援 (医療・3団体)	548,000	
	福島原発被災支援	110,500	
	一般寄付	2,898,699	
	福島・菜の花プロジェクト	0	3,614,699
3. 受取助成金	宗教法人真如苑	1,500,000	1,500,000
4. 事業収益	福島支援事業	497,960	
	イベント関連事業	16,000	
	啓発事業	46,150	560,110
5. その他の収益	受取利息	48	
	雑収益	18,987	19,035
経常収益 計			6,155,844
【経常費用】			
1. 事業費			
(1) 人件費	給料手当・日当	201,000	201,000
(2) その他経費	印刷製本費	445,008	
	会議費(事業)	7,812	
	旅費交通費	1,745,595	
	通信費	62,986	
	荷造運搬	69,372	
	消耗品費	8,833	
	地代家賃	60,000	
	賃借料	11,000	
	仕入(事業)	78,458	
	諸会費	40,000	
	支払手数料	9,329	
	雑費	67,791	2,606,184
事業費 計			2,807,184
2. 管理費			
(1) 人件費	給料手当	789,300	
(2) その他経費	通信費	88,385	
	荷造運賃	11,888	
	水道光熱費	53,797	
	会議費	10,152	
	消耗品費	104,586	
	地代家賃	388,800	
	保険料	17,851	
	租税公課	600	
	諸会費	40,000	
	支払手数料	24,181	
	雑損失	73,000	1,602,540
管理費 計			1,602,540
経常費用 計			4,409,724
当期正味財産増減額			1,746,120
前期繰越正味財産額			2,884,798
次期繰越正味財産額			4,630,918

※その他の事業は実施していません。

2016年度上半期 財務諸表の注記

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)によ

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定率法で償却をする。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込経理方式による。

2. 事業費の内訳

事業費の区分は以下の通りです。

(単位：円)

科目	医療機関支援事業	粉ミルク支援事業	被災者団体支援事業	クリスマスカード事業	業務委託事業	通信誌発行事業	イベント関連事業	派遣事業	福島原発被災支援事業	啓発事業
【経常収益】										
受取寄付金	219,200	57,500	328,800						110,500	
受取助成金									1,500,000	
事業収益							16,000		497,960	46,150
その他の収益									4,000	
経常収益 計	219,200	57,500	328,800	0	0	0	16,000	0	2,112,460	46,150
【事業費】										
(1)人件費 給料手当・日当									201,000	
人件費計	0	0	0	0	0	0	0	0	201,000	0
(2)その他経費	【注：業務委託費・支援金・諸謝金・水道光熱費・新聞図書費・保険料・為替差損は、発生がありませんでしたので表記を省きました。】									
印刷製本費		144		144		57,000			387,720	
会議費							7,812			
旅費交通費							94,160	307,780	1,343,655	
通信費				5,226		54,240			3,600	▲ 80
荷造運搬費						69,372				
消耗品費						8,833				
地代家賃									60,000	
貸借料				6,000			5,000			
仕入(事業)									78,458	
諸会費									40,000	
支払手数料		1,422	948	54		175		432	6,138	160
雑費							11,221		56,570	
その他経費計	0	1,566	948	11,424	0	189,620	118,193	308,212	1,976,141	80
事業費計	0	1,566	948	11,424	0	189,620	118,193	308,212	2,177,141	80
経常収益-事業費	219,200	55,934	327,852	▲ 11,424	0	▲ 189,620	▲ 102,193	▲ 308,212	▲ 64,681	46,070

第17期上半期(2016年4月1日～同年9月30日)の会計報告を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

2016年 11月 14日 監査人 **神野 美知江**

2016年度上半期は、おおむね予算通りに事業が行われました。しかしながら、助成金や企業による大口寄付金(入金)はほぼ上半期に集中しており、下半期に実行される(出金)ウクライナ派遣事業・業務委託費(ホステージ基金への援助)・医療支援・粉ミルク支援・被災者3団体支援事業などを考えますと、非常に厳しい運営となります。

善意の寄付金に頼らざるを得ない、チェルノブイリ救援・中部の資金的基盤の脆弱さを痛感します。事務局として、今後も助成金の獲得など一層努力してまいりたいと思います。

日頃、読者・会員の皆様には多大なご協力を賜り感謝いたしますとともに、今後ともお支えくださいますことを心よりお願い申し上げます。(会計 上田)

事務局便り

22 日早朝に発生した福島沖地震に、5 年前の大震災で被災された人々は、適格かつ冷静な判断で、自分たちの身を守るべく行動されたという。当時の筆舌に尽くしがたい経験と絶望から学習したことを、身と心に如何に深く刻んでいたことか。「何が大事なのかを決め、日々の細かい訓練を 5 年間続けてきて、冷静迅速に対応できた」と、海岸まで 200 メートルの病院の看護師さんは語っている。

「悲惨な経験から学び、二度と犠牲者を出さない」。然るに、この国の原発に群がる人々は、未曾有の原発災害を引き起こしていながら、何も学ぶ気などない。管が折れ、釜が割れてもおかしくない老朽原発稼働を、20 年延長するという。大震災は「来るかもしれない」ではなく、「間違いなく来る」というのに。今年ももうすぐ暮れる。新たな年に光はあるか。 (山盛)

「あなたの思いをチェルノブイリの母親たちへ」…手紙・手記募集中… (戸村)

チェルノブイリ/フクシマ講座では、引き続き「チェルノブイリの母親への手紙・手記」を募集中です。これまで、福島県・関東圏から愛知県に避難された方々から、手紙をお寄せいただいています。ポレーシェ読者の皆さんもぜひ、チェルノブイリやフクシマの母親たちに心を寄せる一文を綴ってください。チェルノブイリから 30 年、フクシマから 5 年が経ち、この間の想いを各自が記録し心の交流をすることは、原発事故を風化させない一つの行動だと思います。また今後、伊那での保養に参加されている方、南相馬市の皆さんにも呼びかけて、「同講座 in 南相馬」を計画する予定です。

栄えある「ボラみみ アワード」に、選考されました!!

11 月 27 日 (日)、いつもお世話になっている「ボラみみより情報局」から「ボラみみ アワード」という素敵な賞をいただきました。先日も「カードキャンペーン」のボランティア募集広告を掲載していただいたところ、さっそく 2 名の方から応募があり、「ボラみみ」の知名度の高さ、そして広報力のすごさには、いつも驚かされています。今後とも、よろしく願いいたします。(J)



編集後記

☆「ポケモン GO」「君の名は。」…今年の流行りにノしてないシニアな私。復活したマハラジャに今さら行く気もない。若かりし頃の SMAP を懐かしがるのが年相応の年末の過ごし方かな? (佳)
☆年末ジャンボが発売され、10 億を夢見て並ぶ人の列。宝くじなんて興味ないけど、名古屋地裁の傍聴席の当たりクジは別! なのに目下 2 連敗…悔しいから初詣はお費金を奮発よっ! (美)
☆祝! トランプ新大統領誕生!! 「英国の EU 離脱」に続き、「表の世界」の革命が加速している。マスメディアは、選挙直前まで得意そうに垂れ流していた「ヒラリー・クリントン圧勝」という予測がはずれ、全くの「思考停止状態」に陥っている。「トランプでも大丈夫?」ではなく、「トランプだから大丈夫!」なのである。「ヒラリーのメールスキャンダル (国家機密漏洩)」に端を発し、「ヒラリー達によるリビア侵略 (ベンガジ事件)」や「ヒラリー達が作った傭兵 (アルカイダや ISIS) による中東などの侵略」「クリントン財団による犯罪 (詐欺・窃盗・マネーロンダリング)」、そして「911 事件の真相究明 (自作自演)」…へと、国を挙げての「真実追求」が始まることになる。トランプは米国経済の復活を最優先課題とし、「分断を避けるため、今は追求したくない」と発言しているが、米議会 (目覚めた市民たち) はそれを許さないだろう。 (J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14

E印刷「エーブリント」

TEL・FAX (052) 871-9473